

## アイアランドの歌曲

スコットランド系イギリス人の作曲家ジョン・アイアランドは、その端正な作風で知られる。3曲はいずれもイギリスの桂冠詩人ジョン・メイスフィールドの詩に作曲したもの。「海への情熱」(1913)は、英国の海を背景に寂寥感のにじむ心情を歌う。「放浪者」(1922)は、路上に生きる放浪者の思想を歌う。「サン・マリーの鈴」(1918)は、船乗りだったメイスフィールドの経験にもとづいている。

## クilterの歌曲

「今や深紅の花びらは眠る」は、《3つの歌曲》(1905)の1曲。詩は、ヴィクトリア朝時代の桂冠詩人アルフレッド・テニスの叙事詩「The Princess」から採られている。初期の作品だが、クilterの歌曲を代表する名品である。「もう泣かないで」は、《7つのエリザベス朝の抒情詩》(1908)の第1曲。原詩は作者不詳。不思議な香気を放つこの詩には、ダウランドをはじめ幾人もの作曲家が作曲している。「行け、愛らしいバラよ」は、《5つのイギリスの愛の抒情詩》(1922)の1曲。イギリスの宮廷詩人エドモンド・ウォラーの詩による。叙情的な旋律にのせて、愛する想いをバラに託して歌う。「喜びの麗しき家」は、《7つのエリザベス朝の抒情詩》の最後を飾る曲。原詩は作者不詳。短いながらも華やかさがある。

## イベール：《4つのドン・キホーテの歌》

軽妙洒脱を得意とするパリ生まれの作曲家ジャック・イベールによる、スペイン情緒を感じさせる歌曲。フョードル・シャリアピン主演のフランス映画『ドン・キホーテ』(1933)のために書かれた。第1曲「ドン・キホーテの出発の歌」は、ルネサンス期のフランス詩人ピエール・ド・ロンサールの詩による。他の3曲はいずれも映画の台本を担当したアレクサンドル・アルヌーの詞による。第2曲「ドゥルシネアへの歌」は、軽快な前奏に続いてロマンチックな胸の内を歌う。第3曲「公爵の歌」は、策略家の公爵の歌。第4曲「ドン・キホーテの死の歌」は、深い悲しみと諦めに満ちている。

## シューベルトの歌曲

シューベルトは1826年にシェイクスピアの戯曲の一節に作曲して、3つの歌を書いた。「酒宴の歌 D888」は、史劇『アントニーとクレオパトラ』第2幕第7場をもとにした、短い祝宴の歌。「セレナード D889」は、『シンベリン』第3幕の挿入歌より、恋人の目覚めを誘う爽やかな歌。「シルヴィアに D891」は、『ヴェローナの二紳士』第4幕第2場からとられた、ミラノ大公の娘シルヴィアに寄せる恋の歌。

### クilter : 《3つのシェイクスピアの歌》

シェイクスピアの戯曲の歌を用いたこの曲集は、1905年に作曲・出版された。第1曲「来たれ、死よ」は、『十二夜』の第2幕第4場における道化フェステの歌。第2曲「おお、愛しき人よ」も、同じく第2幕第3場における道化フェステの歌。第3曲「吹け、吹け、冬の風」は、『お気に召すまま』の第2幕第7場における貴族アミアンズの歌である。

### W. S. グウィン・ウィリアムスの歌曲

ウィリアム・スタンレー・グウィン・ウィリアムスは、作曲家、教育者、作家としてウェールズ音楽の継承と普及に多大な貢献をした人物。1950年に書かれた「なつかしきウェールズの小さな家」は、故郷に対する愛情と郷愁を歌う。ウェールズ語による「神の恵み」は、1943年の作品。

### オーウェン・ウィリアムズ：しゅろの聖日

しゅろの聖日とは、復活祭直前の日曜日のことで、キリストが受難を前にエルサレムに入城したのを記念する日。本曲は、死せる我が子への子守唄の詩に、市井の音楽家オーウェン・ウィリアムズが付曲したもの。悲しみに満ちた旋律が胸を打つ。

### 伝承 (B. デイヴィス編)：海辺／にがり鳥

ブリン・ターフェルの故郷である英国の西端に位置するウェールズでは、英語と並んでウェールズ語が公用語とされている。一聴して英語とはまた違う印象を与える言語だが、ウェールズの人々は、古くから伝えられた言語と文化を大切に守っている。「海辺」は、海辺にまつわる思い出をしつとりと歌う伝承歌。「にがり鳥」は、明るい曲調の童謡である。

### ブリテン：霧めく、霧めく露

作者不詳の民謡をブリテンが編曲したもの。リズムカルな伴奏にのせて歌われる、シンプルな男やもめの歌だが、「霧めく露」が何を意味するのかは謎めいている。1948年作曲の民謡編曲集『英国の島々』第3巻所収。

### コープランドの歌曲

「川のほとり」と「チンガ・リング・チョウ」は、20世紀アメリカの作曲家アーロン・コープランドが1952年に編曲してまとめた「古いアメリカの歌 第2集」所収。前者の原曲は、ロバート・ロウリー作詞作曲の讚美歌。後者は、有名なミンストレル・ソングの一つで、アップテンポの賑やかな曲である。